

川に眠る遺跡

低湿地遺跡の調査

島根県内の発掘調査は丘陵部を対象としたものが多く、現在の水田や河川敷などの低湿地の調査はあまり多くありません。しかし、こつとした水分の多い場所では有機物が空気から遮断されているため遺物が腐りにくく、ふううの遺跡ではめつたに見られない木製品が数多く出土します。土器も、昨日まで使われていたかのような風化していないものが多く、ときには鮮やかな朱に彩られた土器や漆製品も出土し、古代人の色彩感覚の息吹をわれわれに体感させてくれます。

貝塚や多量に捨てられた土器が見つかり、川が当時のごみ捨て場であったことを物語る場合もあれば、木製・土製の人形などが出土し、川辺での祭りを推定させることもあります。墳丘のある古墳とは違い、見た目にはわかりにくい遺跡ですが、その情報量は膨大なものがあるのです。



大地震の跡 / 矢印部分が噴砂(約1500年前)



地震のため折れ曲がった杭



弥生時代のひしゃく

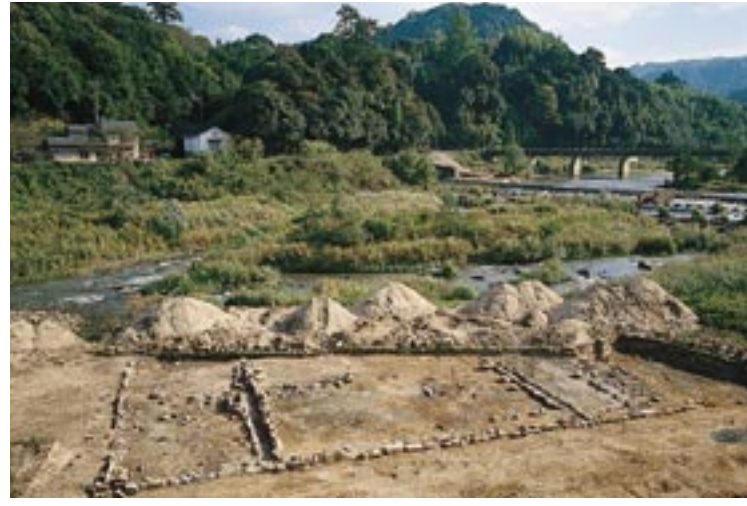
弥生のタイムカプセル!
 ...松江市西川津町・タテチョウ遺跡、原の前遺跡、西川津遺跡...
 「水の都・松江」市街地の北東部を流れ、大橋川にそそぐ朝酌川は、『出雲国風土記』には「水草川」と記されている。この川の流域は、ほとんどすべてが遺跡と言っても過言ではない。大雨のたびに浸水する川を拡幅するため、1975年から発掘調査が始まり、流域の3つの遺跡から、縄文時代から近代までの多くの遺物が出土している。西川津遺跡からは、縄文時代早期の土器や、弥生時代の木製農具、石器の生産過程が

わかる品々をはじめ、赤漆を塗った櫛、模様を描いたひょうたんなど、多彩な遺物が出土している。原の前遺跡では、阪神・淡路大震災にポートアイランドで起こった液状化現象と同じ、噴砂の跡や曲がった杭などが見つかった。古墳時代中ごろに松江周辺で、震度6以上の地震があったことを物語っている。この一帯の調査は、水中ポンプで排水をしながら行っているが、梅雨末期の集中豪雨では遺跡がよく水没する。古代から洪水との戦いがくり返されている地だ。



郷土の偉人・清原太兵衛による佐陀川掘削

...八束郡鹿島町・佐太講武貝塚...
 清原太兵衛が開削した日本海と宍道湖を結ぶ運河は、洪水から村を救ったことで知られる。この大工事の影で、著名な遺跡の大半が失われたことを知る人は少ない。佐太講武貝塚は径約100mにも及ぶ日本海側屈指の大貝塚だが、その中心部は佐陀川の掘削のおりにその大半が失われている。近年貝塚周辺の調査が行われ、県内でも珍しい縄文時代の貝塚の様子が判明する(詳しくは4巻を参照)とともに、文献で伝えられていた運河掘削の難工事ぶりが明らかとなった。



姿を現したまぼろしの尼子氏の城下町...能義郡広瀬町・富田川河床遺跡...

富田川河床遺跡は、陰陽11国の戦国大名であった尼子氏や毛利氏、堀尾氏の城下町遺跡。尼子氏が滅んだあと、政治の中心が松江に移ってからは徐々に衰退し、寛文6年(1666)の大洪水によって一夜にして消滅した。近年の飯梨川の河川改修工事に伴う発掘調査で、300年ぶりにその姿を現した。遺跡からは多くの陶磁器などとともに、当時の町並みをほうふつさせる屋敷跡・鍛冶屋や井戸などが多数見つかった。



よみがえる木製品の数々...漣摩郡仁摩町・川向遺跡...

川向遺跡は潮川の河川改修工事で見つかった弥生時代前期の遺跡で、土器や石器とともに鋤や鎌など多くの木製品が見つかった。木製品は完成品だけでなく、未成品が貯蔵されていた様子を示す珍しい施設も見ついている。

発掘しぼれ話 葉っぱ



川に眠る遺跡の調査は大変です。まわりに矢板を打ち、水がはいらないようにして調査をしますが、水面より下を掘ることも多く、魚や水鳥が頭の上にいることもしばしばです。しかし川の調査でないと味わえない感動もあり、初めて川を調査する人には驚きの連続です。ふうふうなら腐りやすく見ることができない木や骨などがよく出てくるからです。

ある日、調査員は湿った粘土が握りおこされるのをシッと見ていました。ひとかたまりの粘土がバサッと起きあがった瞬間、彼は目を疑いました。鮮やかな緑色の葉っぱがそこにでてきたのです。二〇〇〇年以上前の弥生時代のカシの葉。まるでいま木から落ちたように見えるその葉を調査員は写真に撮ると、すぐさまカメラを取り出し、ライターをのぞきました。しかしそこにあったのは、空気に触れてすでに真っ茶色に変色した枯れ葉のような葉っぱは……。二〇〇〇年の眠りからさめたカシの葉は、さながら浦島太郎の177へ経過した時間をいっきに取り戻したかのようでした。